

私の考えるコーチング論：自叙伝的コーチング論の省察

丸山克俊¹⁾

1. 問題の提起

一何のためのコーチング学研究なのかー

繰り返し愛読した小論・村木正人「コーチング学研究小史と展望」(コーチング学研究Vol.24, No.1 2010.)の中に下記の一文(引用)がある。

筑波大学大学院博士課程「体育科学研究科」が「人間総合科学研究科体育科学専攻」への改組・改名に併せ、「スポーツ医学専攻」及び「ヒューマンケア専攻」の後期3年博士課程として分離独立設置がなされ(2001), さらに, その5年後, コーチング学分野が独立したかたちで, 後期3年の博士課程「コーチング学専攻」が設置された(2006)。

その設立趣旨及び目的は, 以下のように記されている。「これまでわが国では, スポーツや武道のコーチングに関わる高度職業人の育成は専ら修士課程の研究科で行われていました。本専攻は, このような従来の高度職業人レベルの指導者を指導できる人材の養成を目指して設立されたもので, コーチングに関する確かな実務能力と高度の研究能力を兼ね備えた実務型博士の養成を目指しています。(後略)」

村木が引用したこのWebページは, 現在では, 上記の内容に加え, 「現在, 国内外の大学院博士課程において, コーチングに特化した専攻は存在しません。その理由は, 他大学では, 今日の高度化した競技スポーツのコーチング実務と大学院教育の両面に直接携わっている教員を多数確保できないところにあります」と記されている。

そして, 教育研究分野として, コーチング学を大きく一般コーチング学領域と個別コーチング学領域の二つに分け, さらに前者を, ①コーチング論, ②トレーニング学, ③スポーツ運動学の3分野に, 後者を, ①

コーチング学Ⅰ(個人), ②コーチング学Ⅱ(球技), ③コーチング学Ⅲ(武道)の3分野, 計6分野に分けているのである。そして, この6分野には, 「国際クラスの選手の指導経験と高度の研究能力を併せ持った18名の教員を配置して教育と研究を展開」していると記されている。

そして, 村木は, 前述の小論の結びとして, たいへん興味深いことを記している。それは, 「かつて旧ソ連・共産主義諸国では, 一大国家事業としたスポーツシステムの下で, スポーツ実践面での高度な業績を達成すると共に, 今日の世界標準となる高度なトレーニング理論を構築したが, その国家体制の崩壊とともに途絶えることとなった。現時点では, 高等教育機関においてコーチング学教員が単なる実技教員もしくは実践コーチとしてではなく, 実践運動系固有の身体運動知を構築する研究者として, また後継者を育成する教授職(faculty)として活動し得るのは世界的にも稀有な存在である。本学会が『コーチング学会』と改称し, その機関誌が『コーチング学研究』と改名し新たな号を刊行するに際して, 改めてこのことの意味と重要性を再考すると共に, 会員諸氏の今後の活躍と発展を期待したい」である。まさに本格的なコーチング学構築の黎明を迎えているのである。

そして, この村木の結びの言葉に呼応するかのようには, 現在の筑波大学Webページでは, 「本専攻は, コーチング学に特化した世界初の博士課程として, 教育系ならびに体育系の大学および大学院においてコーチングに関する高度の教育と研究を担当できる人材, また各種競技団体やスポーツ組織においても先導的役割を果たすことのできる人材等を養成することになります」(アンダーライン・丸山)と結んでいるのである。

以上のことは, 今日のわが国において, 学問体系として「コーチング学」を構築する環境が整ったことを意味している。体育・スポーツ系大学大学院のホーム

1) 東京理科大学名誉教授
Tokyo University of Science Professor Emeritus

ページを散見すればそのことは明らかである。筑波大学に追随するかたちで「コーチング学専攻」の大学院修士課程（博士前期課程）ならびに博士（後期）課程は、今後、さらに加速度的に整備されることが予想されるのである。

2. コーチング学研究者の職業域

「本格的なコーチング学の黎明」を迎えるもう一つの理由がある。文部科学統計要覧（2016年版・文部科学省刊）によれば、現在のわが国の4年生大学数は779校（短期大学は346校）である。その中でも特に私立大学の定員割れは50%に近づこうとしている。故に、小生が長い間関わってきた大学男女ソフトボール部に限定しても、大学の定員確保のためのソフトボールのチーム強化が積極的に行われているのである。入試対策としては、スポーツ推薦入試を初めとする自己推薦入試が利用され、全国大会へ常時出場させることのできる指導者（監督・コーチ）がスカウトされる。大学によっては専用球場さえも用意するところもあるのが現状である。この傾向は、他種目においても同様である。

周知のように、わが国の教育制度の中のスポーツ活動の位置づけは、その良し悪しはともかく素晴らしいものである。小学校、中学校、高等学校、大学まで、ほとんどのスポーツ種目についての全国大会が用意され、その大会を統括する各種目別の中央競技団体、そして、小学校体育連盟、中学校体育連盟、高等学校体育連盟、大学連盟も充実している。それ故に、特に、中学校・高等学校の生徒にとっては、その進学に際しては、課外部活動の存在と競技実績が貴重な選択要素となるからである。さらに言えることは、スポーツ種目によっては、大学卒業後のマーケット（実業団・プロスポーツ）も充実しているのである。

故に、大学におけるスポーツ指導者（監督・コーチ）の需要は一応安定していると言っても過言ではない。

なにより大学教育という視点から考えれば、各大学はより優れた人間教育のできる指導者を求めるはずである。その採用に際しては、その経歴（競技指導実績・研究実績）によっては、一般教養科目を担当する教員としての採用されることもあれば、事務系職員としての採用も行われることになる。すなわち、上記筑波大学Webページのアンダーラインに示すところの人材養成は、今日のわが国の大学教育の充実という視

点からも、きわめて重要な課題である。特に、私立大学によっては、大学経営的視点からも求められている人材養成でもある。

さらに言うならば、近年、健康・スポーツ科学系学部・学科・コースが増え続けてきた背景には、上記の大学スポーツ指導者（監督・コーチ）の需要と供給のバランス関係があると言っても過言ではないのである。そして、当然のことながら、特定強化種目に予算配分してチーム強化し、その延長線上で定員確保を図ろうとする大学については、体育・スポーツ系学部・学科・コースを持たない場合、一般科目「保健体育」を担当する教員として採用することがベストとなる。スポーツの課外活動を教育の一環としてとらえ、その研究・教育を担当する人材が強く求められているのである。

そして、もう一つの興味深い事実がある。それは、本年（2017年）1月、第93回東京箱根間往復大学駅伝競走において、3連覇を成し遂げた青山学院大学・原晋監督の大学での処遇についてである。

原晋「魔法をかける一アオガク「箱根駅伝」制覇までの4000日一」（講談社、2015年）によれば、原監督は、2004年4月1日付で監督に就任するために、2003年7月、大学の強化委員会とOB会に対してチーム強化のプランとビジョンを示すためのプレゼンテーション（以下、プレゼン）を義務づけられた。いわば就職試験である。プレゼン会場には、陸上部部長・監督・コーチに加え、OB会長以下7名のOB諸氏が同席していたという。その後、理事会と大学執行部へのプレゼンも行っている。そして、大学嘱託職員「監督兼寮長（正式には副寮監）」としての3年契約を結ぶ。その3年後、十分な成果をあげることができなかつたために、1年間の契約延長をかけて改めてプレゼンを行う。場所は法人本部であり、学長、理事長、常務理事、総局長・局長等、約20名、青山学院大学の最高意思決定機関においてのプレゼンであった。慎重に進められている人事であることが理解できるのである。

原監督は、結果として、「人間教育が成果をあげつつあること」（具体的なことも記されているが省略）が認められて、1年間の契約延長が認められ、その翌年、ようやく正式な大学職員として契約を結ぶことになるのである。スポーツの監督・コーチというプロフェッショナル（専門職業人）として大学職員が誕生する時代を迎えている証左でもある。今まで以上にこの傾向が強くなるとすれば、筑波大学の先導的な試みは、大きな社会貢献になるはずである。裏返せば、

コーチング学に特化した大学院修士課程（博士前期課程）・博士（後期）課程の学術的内容とその指導の成果が問われることになる。

3. コーチング学研究の諸課題

昨年ご逝去された筑波大学・図子浩二教授のコーチング学に関する小論「コーチングモデルと体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容」（コーチング学研究Vol.27, No.2 2014）は、筆者にとっては、コーチング学の理論的枠組みを考える上で、また、方法的な諸課題を考える上で、きわめて貴重なものである。

この図子浩二論文（以下、図子論文）は、特集テーマ「私の考えるコーチング論」の一般コーチング学領域の「コーチング論」「トレーニング学」「スポーツ運動学」を包括的に記述するものとして、いつまでも援用され続けるだろうと思う。コーチング学のあるべき内容がたいへんわかりやすく整理されているからである。そして、図子論文は、「おわりに」の中で次のように記している。

当事者主義とは、鳥瞰的にみえる学問の世界とは異なり、災害の場や看護の場、医療の実践現場のことを類推し、「ジャングルのなかをかき分け進む世界に生きる主体」のことを示している。また、「実践に資する学領域のすべてに共通する原理を示す言葉である」と考えている。コーチングにおいても、当事者であるコーチが、自らを省察し再構築し続けるコーチング実践の中で醸成させてきた知を手がかりとし、多くのコーチが納得する体系を確立していくことこそ必要であり、このことは日本コーチング学会の使命であると強く思っている。筆者はこの取り組みを誘引するために本稿を書いた。（アンダーライン・丸山）

筆者（丸山）は、自らのプロフィールについて、その専攻を「（実践）スポーツ教育学・コーチング学・子どもの健康教育学」と記してきた。いずれも『喜怒哀楽を有する生きている人間』が研究対象である。そして、長い間、およそ人間に関する科学的研究については、例えば、「研究と教育の両立」、「理論と実践の統合」という課題が絶えずついて回っていると考えてきた。平易な表現をするならば、『教育学研究が盛んになり教育学の学位取得者は増え続けているのに、なぜ、教育の現場はより良くなっていかないのか』という問題意識がいつもあった。また、スポーツ科学研究

者について言うならば、『スポーツ科学関連学会を中心に活動する大学研究者と自らの専攻実技に関わる中央競技団体等を中心に活動する大学研究者がいわば二極化（乖離）している』ことの是非論についての問題意識も抱えてきた。ちなみに筆者は、その両者を架橋するような位置にいて、教育・研究に関わることを、「自らの生き方」としては目指してきたのである。図子論文が言う上記アンダーラインの「実践に資する学領域のすべてに共通する原理を示す言葉：ジャングルのなかをかき分け進む世界に生きる主体」として生き続けるために必要な立ち位置であった。

このように考え続けてきた筆者にとって、図子論文は、あえて「大学・大学院におけるコーチング学授業」のあり方という、限定的ではあるが「実践現場の指針」となりうる『コーチングモデル』を提示してくれたのである。

現在、「コーチング」という言葉は、「人と組織のパフォーマンスを高めるコミュニケーション・スキル」としてのビジネス・コーチングの用語としても用いられている。筆者の手元には、数多くの『ビジネス・コーチング』の書籍がある。故に、一般の人々の間では、徐々にではあるが、『コーチング』という言葉のイメージ概念がビジネス用語としても形成されてくるはずである。店頭に並ぶ書籍の持つ意味は大きい。このコーチング用語研究については、本学会にとっても今後の一つの重要な課題となるはずである。その意味でも、図子モデルの限定性については、賢明な選択であり、深い意味と意図があると考えられることができる。

4. 図子浩二師のコーチングモデルから学ぶ

図子論文では、体育系大学で行うべき一般コーチング学の内容を体系化したモデルを次のように提示している。

コーチング行動には、指導行動と育成行動という行動基軸があり、この二つの行動の組み合わせによって、選手・チームに応じたコーチングスタイルを選択し実践する可変型コーチングを推進する。アスリートファーストを心がけるとともに、競技力と人間力のダブルゴールに設定したコーチングを実践する。それに加えて、マネジメント行動、事故防止・安全対策行動、国際性に対応できる行動の5つの行動を行う。そして、これらのコーチング行動を正しく適切に行うためには、6つの哲学・倫理を土台として持つことが必

要になる。

これらの構造図が、高度専門職業人、すなわちプロフェッショナルなコーチを養成するための授業内容の体系を示すものである。

(中略)

したがって、今後、体育系大学におけるコーチング学の授業では、5つのコーチング行動と哲学・倫理に関する教育を実施することによって、全人的なコーチングを行うことのできるコーチの養成がなされるべきである。コーチング学の授業は、どの大学も1単位15回か、2単位30回で開催されていることが一般的である。そして、コーチング学の授業では、本稿で示した5つのコーチング行動と倫理・哲学に関する内容を取り込んだシラバスを構成して、コーチングの一般理論を展開し、学生の教育を推進するべきである。

なお、図子論文では、「6つの哲学・倫理の土台」については、「筑波大学体育系・体育・スポーツ指導者の倫理に関する基本方針（筑波大学モデル）を援用している。その内容は、「1.個人の尊厳と人権を尊重する。2.暴力行為を根絶する。3.ハラスメントを防止する。4.ドーピングを防止し、薬物乱用を根絶する。5.安全を確保し、自己防止を徹底する。6.規範を遵守し、倫理観の醸成に努める」である。

長い引用になってしまったけれども、体育・スポーツ系大学で行うべき「一般コーチング学」の内容について、簡潔明瞭に示してくれたのである。図子論文は、「本稿の内容は、著者がこれまで多数の著書や文献、学会活動、出会った数々の人々との議論を通して知り得た知識を、実践に取り込み歩んだ20年のコーチング経験則から創造したものである。そういう意味での私のコーチング論であることを理解して頂くとともに、コーチング学の授業を行う際に役立てて頂ければ幸いである」と結んでいる。含蓄のあるメッセージである。

深い反省であるが、「私の考えるコーチング論」執筆の依頼をいただいてから随分時間が経過した。ご担当者のご理解があつて待っていただいたが、失礼を省みずにお断りしようと思っていた矢先に図子先生の訃報に接した。そして、告別式で先生の遺影と向かい合いながら、ふと『この図子論文を援用させていただくことによって自らのコーチング実践を自叙伝的に省察し、まとめ上げることはできないか』と考えたのであ

る。本稿は、その未熟な試みである。

5. 自叙伝的コーチング論の試み

ここからは、理工系総合大学である東京理科大学野田キャンパスに就職し、一般教養科目「保健体育」を担当する一教員が、「日本一のロマンを求めて」活動を続けた男子ソフトボール部の自叙伝的コーチング論である。大学体育教員として競技力で全国レベルのチームづくりを目指し、その活動を通して人間力の向上を図ろうとした私的コーチング論である。

誰にでもあるような人生の展開で、筆者は昭和52(1977)年4月、大学へ奉職すると同時に、専任教員総勢5名の体育研究室の先輩諸氏から課外活動指導に関わることを勧められる。全国大会(インカレ)を真剣に目指すチームが少ない大学であるが故に、先輩教員には、今までない種目の課外部活動を創設することを勧められる。結果として、男子ソフトボール部を創部する。大学院時代に、後に野球・ソフトボールの世界的な研究者・指導者となられる吉村正先生(早稲田大学)と、同期生というご縁をいただいたからでもある。

また、ソフトボールは、奉職時から体育実技授業で担当することになり、助手時代には多いときで週10コマ、その後も毎年週1回(2,3コマ)担当し続け、定年を迎えるまでの38年間、一貫して担当した種目でもある。そのような背景があつて、体育実技「ソフトボール授業」の目ぼしい受講生に声を掛けて男子ソフトボール部を創部することになったのである。

大学公認団体「体育局」へも加盟が認められ、監督として部員を指導するようになる。この当時から大学体育教員として、監督として真剣に考え続けたことは、『大学で何のために課外部活動の指導をするのか』という課題意識であった。筆者の答えははっきりしていた。図子論文でいうところの、「競技力向上を目的とした指導行動」よりも「人間としてのライフスキル、すなわち人間力の向上を目的とした育成行動」ばかりが念頭にあつた。そこには明確な理由があつた。

6. 大学の目的論

—大学は人物を育てるところである—

日本大学大学院では、教育学・教育史学の碩学・土屋忠雄博士に出会った。学問するとはどういうことかを強烈にご教示いただいた恩師である。入学して間もない2回目の『教育学特殊講義』は「大学の目的」に

ついてであった。その講義内容は、今でも鮮明に記憶している。学校教育法の中には、平成18年の改正前も後も、大学の目的が、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的、及び応用的能力を展開させることを目的とする」と記されている。土屋師は、ここにある『道徳的』という言葉の問題にされた。この『道徳的』は、本来、小中高の学校の目的規定に出てきそうな用語であるが、大学の目的規定にのみ出てくる言葉である。なぜ大学の目的規定に出てくるのか。その意味は、「大学は社会の指導層を育てるところであるが故に、学生は、自分の内面の問題、人生観、社会観、世界観といったことを、しっかり学ばなければならない」ということである。したがって、この『道徳的』が目的規定に入っていることは、大学における一般教養科目の重要性をも意味していることになる。筆者は、この土屋師の講義内容を咀嚼して、「大学は人物（世の中に有為な人材）を育てるところである」と結論づけた。

一般教養を担当する大学教員として卒業研究指導を持たない筆者にとっては、「大学は人物を育てるところである」ことを実践するためには、通常の講義・体育実技の中でより高い課題意識を持って授業すること、課外活動指導で長時間をかけなければならない人間教育をすることが最重要課題となった。すなわち、4年間（留年または進学して5、6年つき合った部員もいる）かけて行う「人間学の卒業研究（創部して9代目の部員の言葉）」と位置づけたのである。

土屋師の学びの中で、もう一つ記しておきたいことがある。土屋忠雄師は、『明治前期教育政策史の研究』で毎日出版文化賞を受賞され、歴史学者としても高い評価を受けた人物である。その講義の中で、「明治期の教育史研究者の中には、当時の子どもたちがどういった教科書を使っていたかも知らない研究者がいる。ありえないことである」と厳しく言及される。プロフェッショナル（専門職業人）になるために必要不可欠な知識、知恵とは何なのか。大学男子ソフトボール部監督に就任した瞬間からは、その延長線上で、ソフトボール指導者が知っていなければならないことは何なのか。さらには、人物を育てるために自らがやらなければならないことは何なのか。当時はそんなことばかり考えていたのである。指導行動・育成行動のベースとなる正しい知識・知恵を学習し、身につけなければならないという課題意識が常にあった。

7. 育成行動の中核を作るために －実業界の成功者の著作物を読み込む－

学生を指導するためにまず考えたことは、政財界を問わず俗にいう世の中のリーダー、とりわけ実業界の成功者の著作物を読み込むことであった。体育・スポーツに関する学術書ではなかった。

理工系総合大学のソフトボール部を卒業した部員が就職する実業界のリーダー諸氏の人生観や社会観、組織論やリーダーシップ論等々を理解しなければならないと考えたのである。その「考え方」を謙虚に学ばなければ、グラウンドにおける具体的な育成行動のイメージを作ることができなかつたからである。というよりも、自らの「考え方」に信念を持って監督を務めるためにその営為は不可欠であったのである。

松下幸之助氏、樋口廣太郎氏、稲盛和夫氏、北尾吉孝氏を初めとする多数の著作物からの学びは、今日に至るまで、自らの人生の指針ともなっている。特に、稲盛和夫師の著作物は、そのほとんどを熟読してきた。「生き方」（サンマーク出版）については、現時点で15回読了している。「哲学・倫理の土台」づくりを自覚し、戒めるために必要だったからである。

平成16（2004）年に初版が刊行された「生き方」は、100万部を超えたベストセラーになった。その中の一節を提示したい。

人生をよりよく生き、幸福という果実を得るには、どうすればよいか。そのことを私は一つの方程式で表現しています。それは、次のようなものです。

人生・仕事の成果＝考え方×熱意×能力

そして、稲盛師は、能力とは才能や知能でもあり、多分に先天的な資質を意味し、健康、運動神経などを意味しているという。また、熱意とは、事をなそうとする情熱や努力する心のことで、自分の意思でコントロールできる後天的な要素であるという。そして、「考え方（心のあり方や生きる姿勢、哲学、理念、思想）」は、三つの要素での中で最も大切なもので、この「考え方」次第で人生・仕事の結果は決まってしまうとまで言及するのである。

そして、熱意と能力が100点満点で採点されるのに対して、「考え方」は、プラス100点からマイナス100点で採点されるという。すなわち、結果として人生・仕事の成果がマイナスにならないように、プラス方向の「考え方」を頭の中で理解するだけでなく、体の

奥までしみ込ませ、血肉化しなければならないと言及するのである。

本誌には、すでに多数の優れた「私の考えるコーチング論」が寄せられている。凶子論文の分析にもあるが、指導行動と育成行動のダブルゴールを目指すことについては、誰も異論を唱えることはないであろう。しかし、人生経験の少ない指導者は、「世の中」や「人の心」を謙虚に学ぶこと、すなわち「育成行動」の基本中の基本である「正しい考え方」を学ぶことから始めなければならないのであると思う。

いずれにしても、人間力の向上を図り「人物を育てる」という育成行動を充実させるための「考え方」とその具体的方法論は、コーチングに関わる個々人がそれぞれの方法で探し続けなければならないのである。筆者の場合、それは前述の書物を通してであり、学会活動や協会・連盟活動を通してであった。そして、「教員という狭い世界」の外にある勉強会・懇親会も大切にしたい。任意の仲間の集まりである異業種懇談会(定期的な勉強会)等であった。

8. 指導行動・育成行動を充実させるために

人生には、『どうせやるならば』というような、あまり根拠はないが『男のロマン』として発してしまう言葉があるものである。男子ソフトボール部を創設して、最初の打ち合わせ会、その後の居酒屋での飲み会で発してしまった言葉が、「全国制覇(途中から日本一)のロマンを求めて」であった。「どうせチームをつくるならばそこまでやるぞ」という決意であった。そして、発してしまった言葉に責任を取り続けることが自らの成長につながるということも深く学んだことである。ただし、当時から筆者が意識していたことは、前述の「大学は人物を育てるところである」という目的を内に秘めて、そのロマンに向かっていくためには、チームづくりの目標はより最も高いところに置かなければならないという自覚を持つことであった。

そして、このようなことを考える背景には、高校時代の卓球部で全国大会(インターハイ)を本気で目指し、あと2勝ができなかったことが、国語教員志望から体育教員志望への進路変更となった過去の記憶があったことも事実である。体育教員への志望変更の理由は、指導者になって全国大会出場どころか優勝を目指すという、どこにでもありそうな、極めて強い動機づけがあったからである。日本体育大学で学んだ筆者は、このような動機で体育・スポーツ系大学を選んだ

若者がいかに多いかをよく理解できる。様々なコーチング論の背景には、監督・コーチ諸氏の人生論が内包されているはずである。すでに本誌が試みているように、たくさんの「コーチング論」が集積されて、いわば帰納法的に「コーチング学」が構築されることが強く求められている。

当時の全日本大学ソフトボール連盟への男子登録チームは50数校(現在は135校)であり、最初のインカレ出場は、オープン参加であった。翌年からはブロック別予選会システムになり、理工系総合大学にとっては、日本一どころかインカレ出場そのものが高ハードルであった。

ところで、凶子論文は、「競技力の向上(指導行動)と人間力の育成(育成行動)は相補的な関係にない」という。相補的な関係ではないけれども、基本的な人間力の育成なくしては、競技力の向上を図れないという関係性があることは確かである。特に、チームゲームの場合、「挨拶や時間・約束厳守」が上等にできていない状態では、本格的な指導行動に入ることは難しいことは確かである。

指導行動の土台づくりとなる学習で大切なことは、より優れた人物(指導者)から『耳学問』をすることが有効である。筆者の場合には、その師匠は、前述の吉村正先生であった。当時、今のように練習グラウンドのない早稲田大学は、本学野田キャンパス・ソフトボール球場を、練習試合のためよく訪れてくれた。試合終了後は、ソフトボール論・技術論・戦術論を初め、ソフトボール指導論の勉強会であった。ハワイ大学ビジネスカレッジからの留学(ソフトボール留学)帰りであった吉村師の野球・ソフトボールについての見識は見事であった。その後、ソフトボール指導書が次々と刊行される時代を迎えることになるけれども、筆者にとっては、吉村正・ソフトボール指導論は別格であった。その人物と差し向かいで長時間ソフトボール談義できる時間は、あまりにも貴重なものであった。

その後、公益財団法人日本体育協会(以下、日体協)と公益財団法人日本ソフトボール協会(以下、日ソ協)が連携して資格認定する「公認指導者養成講習会」を、講義教室・ソフトボール球場(3面)・宿泊施設が完備している東京理科大学で開催するようになった。日体協「公認ソフトボール指導員」の専門科目に相当する日ソ協公認指導者資格「ソフトボール準指導員養成講習会」(11・12月の土日の4日間開催)は12年間、日体協「公認ソフトボールコーチ養成講習会」

(12月に4泊5日で開催)を10年間、日体協「公認ソフトボール上級コーチ養成講習会」もコーチ養成講習会と同時進行(2泊3日)で数回開催している。

シーズンオフに開催されるこれらの講習会は、全国各地から理論・実技共に実績のある講師を招聘することができる最高の学びの機会であった。大学を定年退職するまで運営事務局を担当し続けたけれども、事務局采配で各実技講師のところに、『カバン持ち』と称して部員を張り付けて、補助員を担当させながら技術研鑽の場としたのである。女子マネージャーは受付業務担当である。部員には、ホスピタリティを実践的に学ぶ良い機会となった。より優れた講師から学ぶこと、学ばせることを、常に指導行動の中核におかなければならない。準指導員養成講習会では12年間に1,800名の資格認定をした。講師・サブ講師が4日間で20名余、筆者にとっても指導法を繰り返し学ぶ最良の機会となった。また、講習会運営マネジメントは、今日もおお様々なところで生きている。これも貴重な経験であった。

長い間、通勤電車の往復約1時間半の時間(座る席がある故)は、読書することを生活習慣としてきた。そこで、公刊されたソフトボール指導書や野球指導書も読み漁ってきた。そして、最も興味深く読み込んできたのがプロ野球界を代表する著名な監督・コーチの野球論、指導者論、チームづくり論である。定期的に古本屋(最近ではブックオフ)巡りをしては手に入れて読破した。特に、野村克也氏の著作物は「著作目録」(現在107冊)を作成し、そのほとんどに目を通した。野村師の戦術・戦略論、人材育成論は、指導行動・育成行動のバイブルと言っても過言ではない。しかし、こういった書物の難点は、売れるようになったら多数の出版社が競合し、その結果、様々なタイトルが付けられてはいるが、その内容については、重複しているものが多いことである。最近、特にその傾向は強い。裏返せば、重複して記述されているところこそが、多くの読者の目を引き、インパクトを与えていることは確かである。

もう一つ付記しておきたいことがある。それは、幸運にも、ベースボール・マガジン社刊行の「ソフトボール・マガジン」「コーチング・クリニック」「ベースボール・クリニック」等に、執筆のチャンスをいただくとともに、連載原稿も持たせていただいたことである。合計すれば、通算で約20年間連載させていただいたことになる。そのテーマは様々であり、1ヶ月の間、その内容を頭の中で構想し続ける習慣が、指導

行動・育成行動のベースになる「考え方」を練り上げてくれた。感謝ばかりである。

9. 指導行動・育成行動のキーワードとして — 克己鍛錬主義のチームづくり —

筆者は、指導行動・育成行動を充実させるために大切なことは、「部員一人ひとりの自律(自立)性を促す」ことであると考えている。大学2年生の時から幼児体育の世界に足を踏み入れ、時折り幼稚園・保育園を訪れる幼稚園の先生歴は46年になる。子どもの健康教育を考える場合においても、この「自律性(自ら決めたことを守り実行すること)」は、将来に向けての自立性を促すことにもなり、極めて重要な課題である。コーチングの任務は、その選手が、学業とソフトボールを両立させ、高い目標を達成することであるが、そのためには、その主体が「高い水準の自律性」追求することが最重要課題である。自らの子育てを含め反省ばかりであるが、自律的(自立的)な若者が育つ環境をいかにしてつくることのできるのか。自らが彼らの人間的環境であることを含めて難しい課題であると思う。

その課題解決の具体的方法として、指導行動・育成行動のダブルゴールを目指すためのキーワードを定めることができたのは、今から10数年前のことであり、創部から約25年の歳月を要した。そのキーワードは、「克己鍛錬主義のチームづくり」である。わかりやすく表現すれば、「常に自らノルマを決めて克己鍛錬し、スーツが似合う男にも女にももてる体をつくらう」である。オフシーズン中も絶えず自ら体力・運動能力向上のためのノルマを決めて自律的に鍛え上げ、スーツが似合う姿勢の良い体をつくり、その克己鍛錬を強い意志で続けることによって、目つき、顔つきをより良くし、男(人事担当面接官)にも女(未来の恋人)にももてるようになるということを意味した。部員たちを鼓舞する言葉である。コーチング現場で筆者が最も多く発するようになった言葉である。

理工系総合大学の中でも実力主義の伝統を誇る東京理科大学は、専門の勉強を厳しくさせる大学であり、学生自らも主体的に勉強する大学である。そのような環境の大学において、関東大学(東京都を除く)リーグの一部(三部までである)に常時所属し続け、当時、インカレ14回出場(ベスト8:3回)という実績と、そのチームづくりの要諦が、幸運にも東京理科大学出版センターの目に止まったのである。そして、大学教

育の付加価値を紹介する書籍として公刊されることになったのである。

タイトルは、「良いことに上限はないんだ—東京理科大学ソフトボール部の上等な青春—」（発行：ダイヤモンド・ビジネス企画，発売：ダイヤモンド社，2012年12月）である。グラウンドでの「口ぐせ」がタイトルに採用された。その書籍の『帯』には、「実験と課題に追われながら，全体練習週2回。あとは個人練習で，全国大会出場14回！」と記され，当部の名誉顧問である弁護士・広井武昭先生の推薦文のタイトル「一流の人材を育てるソフトボールを通した人間教育」と本文の抜粋が掲載されている。

筆者には，正直なところ，この程度の競技成績のチームが書籍になっていいのかというまどいはあった。しかし，本学関係者（上層部）が，当部のOB会が精魂込めて刊行した340ページからなる「三十周年記念誌 日本一のロマンを求めて」（2008年刊）に対して高い評価をしてくださったことにより企画立案されたことを素直に喜び，大学の要請を受けることにした。

その「あとがき」には、「私が真剣に考えたことは，創部以来，部員・マネージャー・応援団（経済的な事情等により途中退部した部員で希望する者は応援団として卒業後もOB会に登録される）は，250名を数える。その彼らが一生懸命勉強（学問）し，一生懸命ソフトボールした記録を残すことは，わが部のみならず東京理科大学のすべての部活動に，また，全国各地で私たちと同様に『文武両道』を謙虚に求めて活動する大学運動部関係者に有意義な提言ができるのではないかと記している。いわば，「世の中に有為な人材を育てる」育成行動をコーチングの柱にした一つの事例を紹介できると考えたのである。

そして，その成果の是非論は，「最終講義：グラウンドで学ぶ人生の知恵」でも語ったことであるが，当部のOB・OG諸氏の「世の中での仕事と人生の成果」にかかっているのである。その意味では，コーチングの持つ意味と価値は，人生論的な視座からあまりにも大きいと言わなければならない。

10. 最高学府のコーチングにロマンを求めて

余談であるが，135年の歴史を有する東京理科大学男子ソフトボール部の歴史と伝統「日本一のロマンを求めて」は，筆者が定年を迎えても継続されなければならない。それが最高学府のロマンである。そのため

に，後継者を探し，育てる人事活動に筆者は10数年前から取り組んできた。学会では，野球・ソフトボールに関する研究発表をチェックし，可能な限り会場に出向き，人材を探したのである。

実際，専任教員が講師以上4名，助教1名という限られた枠の中で，学位を有しソフトボール部の指導ができる専任教員候補者を探すことは容易なことではなかったのである。ここではその詳細についてはすべて省略するが，結果として，筆者としては，最高，最良の後継者を見いだすことができたと自負している。

定年間際から，助教として5年間おつき合いいただいた後継者・柳田信也先生と部員諸君に言い続けてきたことは，「100年かかってもインカレ日本一をとろう」である。ソフトボール部という小さな世界ではあっても，その歴史と伝統を背負いながら「文武両道」を追求し，大きなロマンを持って社会貢献する有為な人材を，大学は育てなければならないのである。その人材を育てる人物を育てることは，体育・スポーツ科学のより良い発展と社会貢献のためにも極めて重要なことである。2020年東京オリンピックを視野に入れて，その気運も高めなければならない。まさに「コーチング学」は，国民の評価を受ける大舞台に上がっているのである。

柳田監督率いるチームは，2016年夏，通算15回目のインカレ出場を果たすとともに，秋季一部リーグで初優勝も成し遂げている。また，運動生理学を専攻する学究である柳田先生は，年に数回の国際会議での発表を自らに課し，誠実に実行していることも付記しておきたい。「研究と教育の両立」に果敢にトライされるとともに，学生（部員）の範となることを目指しているのである。

冒頭に述べた筑波大学大学院博士後期課程を初めとする体育・スポーツ系大学院の「コーチング学専攻」に籍を置く学究が，人間に関する科学的研究の大きな課題である「研究と教育の両立」，「理論と実践の統合」に大いにトライしていただきたいと願うものである。その制度的環境は，確かに整えられたのである。今後さらに充実，発展していくのだろうと思う。

そして，この両者を架橋する新しいパラダイム（事物を認識する基本的態度や問題の選択・設定・取扱い・解決の方法など理論体系の枠組を包括的に指す用語：新明解国語辞典・三省堂）の構築にも大きな期待をしておきたい。併せて，図子論文に誘引される若い学究の研究成果にも大きな期待を寄せておきたい。

11. おわりに（謝辞）

本拙稿は、図子論文を援用させていただいたが故に、この後、「プロフェッショナルコーチングのための5つのコーチング行動モデル（図子提案）」の残り3つである、「マネジメント行動、事故防止・安全対策行動、国際性に対応できる行動」についても、自叙伝的コーチング論を進めなければならない。

しかし、ここでは、競技力の向上を目的とする「指導行動」と人間力の向上を目的とする「育成行動」について、限定的に論及することにした。その理由は、図子が、「（アスリートファーストを前提に）競技力と人間力のダブルゴールを達成するためには、指導行動と育成行動という二つの行動基軸が必要になる」と言明しているからである。まずは、自らのコーチング論を、この二つの行動基軸から省察しようと考えたからである。そして、改めて気づかされることは、自らの指導行動・育成行動を支えてきたことは何であったのかということである。その「学び方」についての省察ができただけでも筆者には有意義であった。

私たちは、コーチングを記述するために、行間から読み取ることができない大切なこと、例えば、監督・コーチのグラウンドでの姿や言葉かけの意味にも想いを馳せなければならない。俗的な表現ではあるが、「ベンチでふんぞり返って乱暴な言葉かけをする」指導者は、この国にはまだまだ多いからである。「コーチング学」は、このような現場に隠れている（隠されている）課題解決のためにどのような貢献ができるのか。真摯な姿勢で向き合わなければならないのである。

改めて、「実践に資する学領域のすべてに共通する原理を示す言葉：ジャングルのなかをかき分け進む世界に生きる主体」という図子師の言葉が頭の中をよぎるのである。まさに「実践に資する学領域」としての「コーチング学」を「ジャングルのなかをかき分け進みながら」構築しなければならないのである。

拙論ではあっても、図子論文に「誘引」されてこの小論をまとめることができたことを感謝したい。そして、図子浩二教授のご冥福を心よりご祈念申し上げておきたい。（合掌）

